高校生向け古典文法書における
文法用語・文法説明のゆれについて

小　田　　勝

1．本稿の目的

古典文法において、例えば終止形接続の助動詞「なり」の文法的意味として「伝聞推定」「推定伝聞」の２つの呼称が並び行われている、「つべし」「ぬべし」の「つ」「ぬ」が「強意」とも「確述」とも「確認」とも称されるなど、用語や説明にゆれがあるのが現状である。これらの相違は古典文法書執筆者の見識に基づくものであろうが、このような現状は、中等教育の現場では、決して望ましいことではないだろう。本稿は、高校生向けの古典文法の副教材で、文法用語・文法説明にどのようなゆれが存するのかを調査し、もって古典文法指導および古典文法書・古語辞典編纂の参考に供しようとするものである。(1)

調査の対象とする古典文法書は、主に国語教科書発行会社が刊行するA5版で160～180頁前後、価格が500円前後の、いわゆる「高校生向けの副教材」で、下記の17点である（墨付き括弧は本稿における略称を示す）。一書を基軸としないと比較が困難なので、「数研」を基軸にし(2)、その記載をもとに各書の用語・説明を比較してゆくこととする（記述の順も「数研」による）。

【京都】新修古典文法　二訂版（荻野文子：京都書房2010年；初版2000年）、【桐原】新しい古典文法　四訂版（岩淵匡・坂梨隆三・林史典：桐原書店2006年；初版1996年）、【桐原２】詳解古典文法　改訂版（馬淵和夫：桐原書店1991年；初版1986年）、【数研】読解をたいせつにする体系古典文法　七訂版（黒川行信：数研出版2008年；初版1990年）、【第一】完全マスター古典文法　新版二訂（金子彰・野村貴郎・山口豊：第一学習社2010年改訂11版；初版2000年）、【大修館】古典にいざなう新古典文法（北原保雄：大修館書店1992年）、【大修館２】新訂古典文法（田辺正男：大修館書店1986年）、【中央】新・古典の文法　新版（秋本守英・渡辺輝道：中央図書1999年；初版1991年）、【東書】新精選古典文法（小林國雄：東京書籍2013年）、【東書２】新版古典文法（東京書籍2008年）、【東書３】よくわかる新選古典文法（小町谷照彦：東京書籍1997年）、【文英】読解のための必修古典文法　改訂版（宇都宮啓

吾・横田隆志・西川兼司：文英堂2013年；初版2009年)、【文英２】標準新古典文法（山口堯二：文英堂2000年)、【明治】新しい古典文法（久保田淳・白藤禮幸：明治書院2003年)、【明治２】精選古典文法　改訂版（築島裕・白藤禮幸：明治書院1999年)、【明治３】明解古典文法　改訂版（松村明・坂梨隆三：明治書院1989年；初版1986年)、【右文】生徒のための古典読解文法　改訂版（中村幸弘：右文書院1997年改訂8刷；初版1992年）

２．用言について

①連体形での文の終止

連体形で文を終止する語法について、次のような名称のゆれがみえる。

ａ「連体形止め」（桐原２・数研・第一・中央・文英２・明治２）

ｂ「連体止め」（文英・明治・明治３）

ｃ「連体形終止」（大修館）

※用語なし（京都・桐原・大修館２・東書・東書２・東書３・右文）

②動詞の活用表の語幹の表記

動詞の活用表、例えば四段動詞「聞く」の活用表で、語幹を「聞‖か｜き｜く…」のように漢字で示すものと、「き‖か｜き｜く…」のように平仮名で示すものとがある。どうでもよいことかもしれないが、統一しないと学校現場での板書やプリントで混乱することもあろう。これには、次の４タイプがみえる（下線部分が語幹)。

	聞く	見る
Ａタイプ	き‖か｜き｜く…	（み）‖み｜み｜みる…
Ｂタイプ	き‖か｜き｜く…	（見）‖み｜み｜みる…
Ｃタイプ	聞‖か｜き｜く…	（み）‖み｜み｜みる…
Ｄタイプ	聞‖か｜き｜く…	（見）‖み｜み｜みる…

すなわち、語幹をすべて平仮名で表示するもの（Ａタイプ)、語幹は平仮名で表示するが、「語幹と語尾の区別がない」場合は括弧に漢字で表示するもの（Ｂタイプ)、語幹は漢字で表示するが、「語幹と語尾の区別がない」場合は括弧に平仮名で表示するもの（Ｃタイプ)、語幹をすべて漢字表示するもの（Ｄタイプ）である（漢字表示にはルビ付きを含む)。調査した文法書ではＤタイプが最も多く、次いでＡタイプである。ＢタイプとＣタイプは、それぞれ１点ずつで異色ではある。

Ａタイプ（数研・第一・東書２・東書３・文英２）

Bタイプ（大修館）

Cタイプ（東書）

Dタイプ（京都・桐原・桐原２・大修館２・中央・文英・明治・明治２・右文）

※「明治３」は「き（聞）」のような表示

私見では、語幹を漢字で表記する方式では、「漢字部分が必ず語幹である」と生徒に誤解を与えるおそれがあるので、平仮名方式の方がよいのではないかと思う（例えば「聞こゆ」の語幹は「聞こ」である）。

③形容詞の仮定条件形について

形容詞の仮定条件形「-くは」の「-く」について、未然形とする説と連用形とする説とがある。[3] これについては次の通りで、連用形説を採るものの方が多い。

ａ１　未然形（京都[4]・第一）

２　両論を併記して未然形説を採る（東書２・東書３・明治３・右文）

ｂ１　連用形（大修館・中央）

２　両論を併記して連用形説を採る（桐原・桐原２・数研・大修館２・東書・文英・文英２・明治・明治２）

なお、「−くは」の「−く」が未然形なら「は」は接続助詞「ば」が清音化したもの、連用形なら「は」は係助詞ということになるが、「文英２」だけは「−く」を連用形としながら「は」を接続助詞と説明している（96頁）。

④「…を＋形容詞語幹＋み」（「…ガ…ノデ」）の「を」について

「…を＋形容詞語幹＋み」の「を」を格助詞とする説と間投助詞とする説とがある。

ａ１　間投助詞（桐原・第一・東書・東書２・東書３・明治３）

２　両論を併記して間投助詞説を採る（大修館２）

ｂ　格助詞（文英２）

※何助詞か説明がないもの（京都・桐原２・数研・大修館・中央・文英・明治・明治２・右文）

これについて、現行の古語辞典は次のようである。[5]

ａ間投助詞：旺文社全訳古語辞典（第四版）・角川全訳古語辞典・小学館古語大辞典・日本国語大辞典（第二版）・古語林・ベネッセ古語辞典

ｂ格助詞：旺文社古語辞典（第十版）、学研新古語辞典、角川古語大辞典、三省堂全訳読解古語辞典（第四版）、三省堂詳説古語辞典、新明解古語辞典（第三版）、例解

古語辞典（第三版）、小学館全文全訳古語辞典、全訳全解古語辞典（文英堂）
古語辞典は格助詞説を採るものが多いが、古典文法書で格助詞としているのは調査資料中「文英２」の１点しかない。「忌み忍ぶる事をしなも［乎志奈母］、常労しみ」（続紀宣命）のように係助詞等を下接した例が存することから、「を」は格助詞とする方が妥当である（近藤泰弘1980）。

３．副詞について

①副詞類の記述の位置

調査資料のすべてで、「用言→助動詞→助詞」という記述の順序をとっているが、「副詞・連体詞・接続詞・感動詞」の類を用言の次に置くものと付属語の後の一番最後に置くものとの２種がある（後者の方が多い）。文法用語のゆれの問題ではないが、ここに実態を掲示しておく。

ａ付属語の後におくもの（京都・桐原・桐原２・第一・大修館・東書・東書２・東書３・文英２・明治・明治２・明治３・右文）

ｂ付属語の前におくもの（数研・大修館２・中央・文英）

②状態副詞・陳述副詞の名称

状態副詞の名称は、「状態の副詞」とするものが最も多いが（京都・桐原・桐原２・大修館・大修館２・中央・東書・東書２・東書３・文英・明治・明治２・右文）、「第一」は「状態の副詞（様態の副詞・情態の副詞）」、「数研・文英２」は「状態の副詞（様態の副詞）」と別称も併記している。「明治３」は「状態を表す副詞」とする。

陳述副詞の名称については、「陳述の副詞」、「呼応の副詞」、「叙述と関係のある副詞」の３種がみられる。別称の併記もあわせると、次のようである。

ａ１「陳述の副詞（呼応の副詞・叙述の副詞とも）」（数研・大修館２・東書・文英・右文）

２「陳述の副詞（呼応の副詞とも）」（中央・東書２）

３「陳述の副詞（叙述の副詞とも）」（桐原２）

４「陳述の副詞」（桐原２・東書３）

ｂ１「呼応の副詞（叙述の副詞・陳述の副詞とも）」（桐原・第一）

２「呼応の副詞（陳述の副詞とも）」（京都）

３「呼応の副詞」（大修館）

ｃ１「叙述と関係のある副詞（叙述の副詞・陳述の副詞）」（明治・明治２）

2「叙述と関係のある副詞（呼応の副詞とも）」（明治３）

「大修館」が「呼応の副詞」のみ、「桐原２・東書３」が「陳述の副詞」のみなので、大学入試問題等でこれに触れる場合には、「陳述の副詞（呼応の副詞）」と併記するのが望ましいだろう。この併記ですべての文法書の学習者がカバーできる。

４．助動詞について

①「る・らる」について

「る・らる」は自発を本義とする説（例えば橋本進吉、時枝誠記）と、受身を本義とする説（例えば山田孝雄）とがあり、それに伴って「る・らる」の文法的意味の掲出順序に次のような差が見られる。

a「自発・可能・受身・尊敬」の順（桐原・桐原２・第一・大修館・東書２・文英・明治・明治２・右文）

b１「受身・尊敬・自発・可能」の順（数研・東書・東書３・文英２・明治３）

２「受身・自発・可能・尊敬」の順（大修館２・中央）

３「受身・可能・自発・尊敬」の順（京都）

自発と受身のどちらが本義かは決められないが、尊敬の意だけは新しく平安時代に生じたものなので、ｂ１の掲出順はいかがなものかと思う（案外多いのは、この順だと口調が良いからだろうか）。

「る・らる」について問題となるのは尊敬用法である。まず、

・大方の世のためしとも。うしろやすき方は並びなくものせらるる人なり。（源氏物語・若菜上）

のような単独用法（尊敬語以外の動詞に下接して尊敬の意を表す用法）については問題がない。問題となるのは「思さる」などの尊敬語と一体となった「る・らる」である。稿者は、

他の尊敬語「おぼす」「おぼしめす」に付いた「る」が尊敬になるのは中世以降で、平安時代の用例では尊敬にはならない。（『旺文社全訳古語辞典　第四版』「る」の項）

という立場をとっているが[6]、今回調査した文法書では、「京都・桐原・桐原２・数研・第一・東書・東書２・東書３・明治２」の９点が、「思さる」のような敬語動詞に下接する「る・らる」を尊敬としている（「大修館・大修館２・中央・文英・文英２・明治・明治３」は敬語動詞に付く場合に言及していない）。高校生向け古典文法書の場合、時代別の記述が困難なのでやむを得ない面があるが、これに関して古語辞典では矛盾した記述が散見されるように思う。例えば、『三省堂全訳読解古語辞典　第四版』で「る」

を引くと、

④の「尊敬」用法は…（中略）…平安時代の和文では「おぼさる」などの形で他の尊敬動詞と一体になって敬意を表していた。

とあり、一方同書で「思さる」を引くと、

平安時代は①（＝引用者注、「る」が自発の場合）の用法が多い。…（中略）…③（＝引用者注、「る」が尊敬の場合）は平安時代末期からの用法で…

とある。「る」の項では平安時代の「思さる」の「る」は尊敬であるといい、「思さる」の項では平安時代の「思さる」の「る」は自発が多く、尊敬の「る」は平安時代末期からの用法であるという。両者の記述は噛み合っているだろうか（『ベネッセ古語辞典』などでも同様の状況がみられる）。このような次第であるから、『源氏物語』など平安時代中期の作品中の「思さる」の「る」に線を引いて、これが「尊敬」か「自発」か選択させるといった試験問題は作ることができない[7]（上記９点の古典文法書の学習者なら「尊敬」を選ぶことになるのだろう。稿者なら「自発」を選ぶが）。

②「つべし」「ぬべし」の文法的意味

「つべし」「ぬべし」「てむ」「なむ」など未実現の事態を表す「つ」「ぬ」の意味について、次のような名称が用いられている。

ａ１「強意」（桐原・大修館２・文英・文英２）
　２「強意・確述」（明治）
　３「強意（確述・確認）」（桐原２・数研・東書２）
　４「強意（強調・確述）」（中央）
　５「強意（確述）」（東書・東書３・明治２）
ｂ１「確述・強意」（京都・右文）
　２「確述（強意）」（第一）
ｃ「確認・強調」（大修館・明治３）

「強意」という用語は、副助詞の「し」や係助詞「こそ」などにも用いられ、「確認」は尋ねたり調べたりという意味を含むので、「キット…ニ違イナイ」という訳出に注意を向けさせるための文法上の説明としては「確述」の用語が望ましいと思う（ただし「確述」は日常用いられる語ではない点で、分かりにくいという欠点があるかもしれない）。しかし「強意」の用語は長く広く用いられており、大学入試でも「強意」の名称が用いられているようである[8]。調査資料のすべてで「強意」の名称をあげている。

③「り」の接続

「り」の接続に関する説明は、次のようである。[9]

a 1「四已・サ未」（命令形説をあげず）（京都・大修館）

2「四已・サ未」（「四命・サ命」説もある）（数研・第一・明治３・右文）

3「四已・サ未」（「四命」説もある）（桐原・桐原２・東書２・文英）

4「四已・サ未」（奈良時代には、四段の命令形や、サ変の命令形「せ（よ）」と同じ音についていた）（大修館２）

b 1「四命・サ未」（「四已」説もある）（東書・東書３・文英２・明治）

2「四命・サ未」（「四已・サ命」説もある）（明治２）

c「四命・サ命」（「四已・サ未」説もある）（中央）

「サ変の命令形」とする場合（a2、b2、c）は、「サ変の命令形につくときは、「よ」のない形につく」（「数研」）のような説明が必要になる。a4が最も“正直”のような気もするが、これはこれで上代特殊仮名遣いを知らないと意味不明の説明ではあろう。私見では、どうせ上記のすべてが真実ではないのだから[10]、説明の方便としてはa3が最もよかろうと思う（「サ変の命令形」に付いたといわなければならない根拠はない上に、「よ」のない命令形というのも高校生にはわかりにくい説明だろう）。

④「べし」の文法的意味

「べし」の文法的意味について、その表示をまとめると次のようである。

	京都	桐原	桐2	数研	第一	大修	大2	中央	東書	東2	東3	文英	文2	明治	明2	明3	右文
推量	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
意志	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
決意			○				○							○			
確信			○														
当然	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
義務		○		○	○		○	○				○		○			○
必要							○										
適当	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
勧誘		○	○	○	○	○	○					○		○	○	○	
可能	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
命令	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
予定														○			

（「大修館２」は「可能」のほかに「可能推量」をたてる）

これをみると、すべての文法書であげられている「べし」の意味は、「推量・意志・当然・適当・可能・命令」の６つである。ほかに「義務」と「勧誘」をあげるものが半数

くらいにあり、「決意・確信・必要・予定」をあげるものは極めて少数である。「べし」の打消である「まじ」については、若干の用語の相違はあるものの、おおむね、

打消推量・打消意志・打消当然・不適当（打消適当）・禁止・不可能

で一致している。ただし下線で示した「不可能」については、「第一・大修館２・明治」が「不可能推量」とするほか、14点の文法書で「不可能」と表示されている。これは当然に「不可能推量」の方が適切であると評される（「まじ」は「べし」の打消であると教えるので、「べし」の「可能」との対比を考慮して「不可能」としているのだろうが）。

なお「べし」の文法的意味に関して、その「当然」「適当」といった名称ラベルを１つ選ばせる、という文法問題をよくみるが、稿者には、このような問題が解答可能か懐疑的である。例えば、

・速やかにすべきこと（＝仏道修行）をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて、過ぎにしことの悔しきなり。（徒然草・49）

の下線部は「当然」か「適当」か「義務」か決定できないのではないか（まさに現代語の「べきだ」に当たる意味で、『明鏡国語辞典』はこれを「当然だと義務づける」と説明している）。「まじ」の「禁止」と「不適当」と「打消当然」も必ずしも区別できないだろうと思う。

⑤「推量」と「推定」の表示区分について

根拠のある「推量」を「推定」という用語で呼ぶ場合、「らし」「めり」「なり（終止形接続）」がその対象となろう。事実、多くの文法書でこの３語の文法的意味を「推定」と表示している（京都・桐原・桐原２・数研・第一・大修館・東書・東書２・文英・文英２・明治２・右文）。一方、「大修館２・中央・東書３・明治３」の４点は、「らし」「なり」を「推定」、「めり」を「推量」としている[(11)]。「なり」を「推定」、「めり」を「推量」とするのは、一見不整合のようであるが、このような扱いをする古語辞典は案外多いのである。例えば、次の辞書はそのような扱いである。

旺文社古語辞典（第十版）、旺文社全訳古語辞典（第四版）、小学館古語大辞典、角川全訳古語辞典、角川必携古語辞典、古語林、三省堂詳説古語辞典、例解古語辞典（第三版）、三省堂全訳基本古語辞典（第三版）

一方、「めり」「なり」ともに「推定」とするのは次の辞書である。

三省堂全訳読解古語辞典（第四版）、新明解古語辞典（第三版）、全訳全解古語辞典（文英堂）、ベネッセ古語辞典、ベネッセ全訳古語辞典、小学館全文全訳古語辞典、東書最新全訳古語辞典、学研全訳用例古語辞典（第二版）

「めり」が証拠に基づく判断であることは間違いないが、その証拠が視覚に基づいている点が「なり」と決定的に違うところで、“見ていること”と“推定すること”は本来相容れないものである。聴覚であれば、「隣の部屋で音が聞こえる。→きっと隣の部屋に人がいるのだろう。」という“推定”が成立するが、視覚の場合、目の前で見ているわけだから、そこに推定の余地は本来ない。そこで、結局、「めり」による判断というのは、目の前に見えている、例えば「顔色」から、「調子が悪いのだろう」と判断するような、話し手の主観的な判断に偏ることになる。「婉曲」の意味の存在も併せて、「めり」を「推量」としたくなるのは、このような事情によるのである。

⑥終止形接続の「なり」の意味表示について

終止形接続の「なり」の意味を一括して表示するとき、「伝聞推定」とも「推定伝聞」ともいわれる。調査をすると、次の通りで、「伝聞推定」が圧倒的に多い。

a「伝聞推定」（京都・桐原・桐原２・数研・大修館２・中央・東書・東書２・東書３・文英・明治・明治２・明治３）

b「推定伝聞」（第一・大修館・右文）

c「推量」（文英２）

「なり」は「伝聞ニヨル推定」ではないし、意味の派生順を考えても、「伝聞推定」は全くおかしな用語であると思うが、なぜこんなに広く用いられているのか、稿者には理解できない。

⑦「希望」「願望」の用語の使い分けについて

希望・願望の助動詞・助詞に付ける名称には、はなはだしいゆれがみられる。すなわち、次の５種の付属語に対して次のような名称が行われている。

⑴まほし・たし、⑵ばや、⑶（て／に）しが（な）、⑷もが（な）・がな、⑸なむ（未然形接続の終助詞）

Ⅰ「希望」と「願望」を使い分けないもの

aすべて「希望」を用いるもの

a１　⑴⑵⑶＝希望、⑷⑸＝他に対する希望（文英２）

a２　⑴⑶⑷＝希望、⑵＝自己の希望、⑸＝他に対する希望（明治）

a２　⑴＝希望、⑵⑶⑷＝自己の希望、⑸＝他に対する希望（明治２・明治３）

bすべて「願望」を用いるもの

b１　⑴＝願望、⑵⑶⑷＝自己願望、⑸＝他者願望（京都）

ｂ２　(1)＝願望、(2)(3)＝自己の願望、(4)＝存在・状態に対する願望、(5)＝他への願望（桐原）

ｂ３　(1)(4)＝願望、(2)(3)＝自己の願望、(5)＝他に対する願望（第一）

Ⅱ「希望」と「願望」を使い分けるもの

ｃ「まほし」を「希望」、「なむ」を「願望」とするもの

ｃ１　(1)(2)(3)＝希望、(4)(5)＝願望（大修館２・中央・東書３）

ｃ２　(1)＝希望、(2)(3)＝自己の希望、(4)(5)＝他に対する願望（東書２）

ｃ３　(1)＝希望、(2)(3)＝自己の希望、(4)＝願望、(5)＝他への願望（桐原２・数研）

ｃ４　(1)＝希望、(2)(3)＝自己の願望、(4)＝願望、(5)＝他に対する願望（東書）

ｃ５　(1)＝希望、(2)(3)＝自分がそうしたいという願望、(4)＝こうあってほしいという願望、(5)を相手にそうしてほしいという願望（大修館）

ｃ６　(1)＝希望（願望）、(2)(3)(4)＝自己の願望。(5)＝他に対する願望（右文）

ｄ「まほし」を「願望」、「なむ」を「希望」とするもの

ｄ　(1)(4)＝願望、(2)(3)＝自己の願望、(5)＝他への希望（文英）

私見によれば、望んでいる主体と望まれている事態の動作主が一致するもの（現代語の「～たい」に相当）がおおむね(1)(2)(3)、一致しないもの（現代語の「～てほしい」に相当）がおおむね(4)(5)に当たるから、(1)(2)(3)を希望、(4)(5)を願望として用語を使い分ける、c1、c2、c3が望ましいと思う。拙著『古代日本語文法』（おうふう2007年）、『古典文法詳説』（おうふう2010年）では、(1)～(5)の全体を「希望」とし、(1)(2)(3)を「願望」、(4)(5)を「希求」としたが、あまり一般性のある用語の用い方ではなかった。

なお、(3)の「（て／に）しが（な）」の「が」の清濁は、次の通りである。

ａ　濁音「が」（清音「か」も）（京都・数研・第一・大修館２・東書・文英・明治２）
　　濁音「が」（清音説には触れず）（桐原・桐原２・東書２・東書３・明治・明治３）

ｂ　清音「か」（濁音「が」も）（大修館・中央・文英２・右文）

清音に触れない文法書がある一方で、濁音に触れないものはないから、大学入試問題の本文等では「（て／に）しが（な）」と濁音で表記する必要があると思う。

５．助詞について

①文末用法の「ぞ」「や」「か」を係助詞とするか、終助詞とするか

文末の「ぞ」「や」「か」を係助詞とするか、終助詞とするかを調査すると、次のようである[12]（「終助詞とする説もある」のように他説を併記するものも多いが、ここでは主軸となる取り扱いで分類する）。

a　「ぞ」「や」「か」ともに係助詞の文末用法とする（桐原・数研・大修館２・中央・東書２・東書３・文英・文英２・明治・明治２）

b　「や」「か」を係助詞の文末用法、「ぞ」を終助詞とする（京都・桐原２・第一・大修館・東書）

c　「ぞ」「や」「か」ともに終助詞とする（右文）

②「結びの流れ」の名称

いわゆる「結びの流れ」については、次のような名称表示が行われている（括弧内は別称の併記）。

a１　「結びの流れ（消滅・消去）」（京都・数研・大修館２・明治２）

　２　「結びの流れ（消滅）」（第一・大修館・明治・明治３）

b１　「結びの消滅（消失・消去・流れ）」（文英２）

　２　「結びの消滅（消去・流れ）」（桐原・桐原２・右文）

　３　「結びの消滅（流れ）」（東書・東書２・東書３・文英）

　４　「結びの消滅（消去）」（中央）

別称の併記部分を含めれば、「結びの流れ」の用語を用いていないのは「中央」だけである。

注

（１）本稿の目的は文法説明のゆれの現状を把握することにあるのであって、各書にみられる説明の創意工夫等にはコメントしない。また、各書に優劣をつけようとする意図もない。

（２）数研出版のホームページ（http://www.chart.co.jp/corp/00epitome/epitome_index.html）によれば、「現在「体系古典文法」は、業界トップのシェアを誇り」とのことである。

（３）「舟とむる遠方人のなくはこそ明日帰り来むせなと待ち見め」（源氏・薄雲）のような承接順は「は」が接続助詞である（したがって上の形容詞は未然形である）ことを示しているが（係助詞「こそ」は接続助詞「ば」に対して下接し、係助詞「は」に対しては上接する）、「よろしうは参り給へ。」（池田本源氏物語・浮舟）のようなウ音便の存在は「よろしう」が連用形であることを示していて（形容詞のウ音便は連用形にしか起きない）、「−くは」の「−く」が未然形か連用形か決定できない（和

田利政1987)。

(4)「京都」は未然形説を採りながら、形容詞の活用表で未然形の「く」「しく」に括弧を付けているが、不整合である。

(5)『東書最新全訳古語辞典』は「を」の項で「を」を格助詞とし、「み」の項では「を」を間投助詞としている。

(6) 杉崎一雄(1968:97)も「特に平安時代では「れ給ふ」「られ給ふ」のように、「給ふ」につづいた「る」「らる」や「おぼさる」のように尊敬語についた「る」は尊敬ではなく、自発その他とみていいことが多い。」と述べる。

(7)「仰せらる」の「らる」も古典文法書にどう記述すべきか悩ましい問題が存する(問題の要点は『小学館古語大辞典』「仰す」の「語誌」欄を参照されたい)。

(8) 例えば、2013年大学入試センター本試験の古文では、「ぬ」の意味を選ばせる問題で、「完了(強意)の助動詞」のような選択肢で出題されている。

(9)「四已」「四命」「サ未」「サ命」はそれぞれ「四段活用の已然形、四段活用の命令形、サ変の未然形、サ変の命令形に接続する」の意。

(10) 本当は動詞の連用形に「あり」が付いた形である。なお、「京都」に「咲くあり→咲きゃり→咲けり」となったという説明があるが、誤りである。

(11)「明治」は「なり」を「推定(音声や音響によって推量する)」、「めり」を「推量(推定)(目で見える様子から推量する)」、「らし」を「推量(ある確かな根拠によって推量する)」としていて、「推量」と「推定」の使い分けが明瞭でない。

(12)「明治3」は、「や」「か」を係助詞の文末用法とするが、「ぞ」の取り扱いは不明。

引用文献

近藤泰弘(1980)　「助詞「を」の分類」『国語と国文学』58-10

杉崎一雄(1968)　『国語法概説』有精堂

和田利政(1987)　「形容詞の機能」『国文法講座2』明治書院